



たか かし みつ おみ
高橋光臣さん

俳優
2004(平成16)年3月 法学部法律学科卒業



ラグビーの名門、大阪・啓光学園高校でセンターを務めたラグーマン。それを知って、初めてラグビーというスポーツを身近に親とどきの、言い知れない沸き立つ気持ちを感じ出した。試合前、ここに立るといふ喜びと気合が高揚するあまり、涙を流しながらフィールドに向かう選手姿。一回のプレーに対する究極とも言える崇高な姿勢「ラグビー」というスポーツが持つ精神が、彼の仕事の真摯な姿勢とシンクロした。



『2006テレビ朝日・東映・AG・東映』
ボウケンジャーは記念すべきスーパー戦隊シリーズ30作品目。皆さんがヒーローになりきって遊んでいたのは80年代末のマスクマンやターボレンジャーの頃?

進学した東洋大学のラグビー部は、花園連覇の華々しい高校時代と違って、関東大学リーグの1部から2部をさまよって低迷期にあった。名門出身の意地にかけて、東洋大ラグビー部を何とか立て直し、強くしたいという思いを持っていた。

しかしひとりの思いだけではどうにもならないのがチームスポーツ。大学4年の時には、まさかの3部落ち。このとき後輩に対して、お前ら、何やつてるんだよ」と責めてしまったんです。本当は気づいていた。この結果は開戦する全員の責任であること。最高学年である自分たちのマネジメントが問われるべきだということ。そして部の雰囲気は「楽しく」「仲良く」だった故に、厳しさを保持して、良い緊張感を保てなかったことが、一番の敗因だということ。高橋さんはその出来事を含めて、心に刻み、自省するための原点にしている。

いわば「負け試合」で終わってしまった自分に、何ができたのか。自問自答の末、チームスポーツから離れて、自分ひとりで勝負できることを試したいという思いが、「俳優」への志となった。卒業とほぼ同時に同じくして、芸能プロダクションの門を叩き、エグゼクティブ、CMなどをこなしながら初めて役がいたのが、昨年夏に放映されたドラマ「ウツ

手を挙げて、次に踏み込め。強さと勇氣は誰の心の中にもある！

いまや一流タレントへの登竜門とも言われる「スーパー戦隊シリーズ」の新ヒーローを射止めたのは、24歳のクルド熱い、ラグーマンだ。
2月19日にスタートした、テレビ朝日系「日曜午前十時30分」『轟轟戦隊ボウケンジャー』で熱き冒険者・ボウケンレッドこと明石晩夜を演じる高橋さんは「撮影現場は崖や海や砂丘やら。内心はヒヤヒヤでも、「レッド」の名にかけてビシッと決めないと」とさわやかに笑った。

ターボレイズ(スベシャル版)。そして、3000名が応募した「スーパー戦隊のオプティション」を勝ち抜き、その頂点ともいえるべき「レッド」役を掴んだ。

「これは最近の、レッド」と比べても、今回はリッター色が非常に強い。役柄はもちろん、現場でも頼れるリッターであろうと思いつながら、幼い頃から役者を目指し、キャリアが長い、年のベテランに圧倒されている。これを経験してきたのが自分の強み。大学ラグビー部での苦い経験があるべきリッターの影の福にならぬ。劇中、ボウケンレッド(明石晩夜)のコードネームは「チーフ」だ。自身の経験と同様、恩師の教えをすべて胸に留めている。啓光学園の黄金時代を築き上げた記敏敏和監督の妥協と満足。大学ラグビー部の高田直樹コーチ(現監督)がTシャツに書いてくれた「大人になれ」というメッセージ。監督とコーチの言葉が何度自分を支えたか分からない。自分が選択すべき行動の拠所です。恩師への深い敬意を感じさせる。

彼をいつもそばで見守るマネージャーの齋藤田さんは、高橋さんを「真っ直ぐな清潔感がある人」と評する。働く人芸ともいわれる戦隊シリーズは、助を働かせて立ち振る舞えなければ、イタタンであろうがんだらうが怒鳴り飛ばされるようなハードな現場。素直に涙を下げ、次には期待されるものを確実に演じきる逸材だといふ。

高橋さんは「恥ずかしさが見えることほど格好悪いことはない」と肝に銘じる。「子どもたちが初めて、カッコイイ」に憧れる番組。普通では考えられないギョウゴウとセリフに最初は恥ずかしさがあったけれど、照れは絶対駄目だよ。全身でヒーローを演じたい。たどろろとろろと回らない瞬間でも、キエてやるよ」という強いプロ意識が随分。

「まず、手を挙げられる人間」を目指したい、という「大学の授業で手を挙げる人なんてあまりいないでしょう、でもその手を挙げることで、何かが変わるかも知れないし、周囲の記憶にも残る。迷ったら動いてみる方を選んでください。」
手を挙げて、次に踏み込め。素直も真っ直ぐなヒーロー、ボウケンレッドが「新しい冒険」を恐れてはならないことをメッセージに託した。